



TITLE:

摘録

AUTHOR(S):

CITATION:

摘録. 地球 1928, 9(6): 464-467

ISSUE DATE:

1928-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183446>

RIGHT:

摘錄

○小金井長精 人類學上から見たる日本民族（人類

學雜誌第四十三卷第四號昭和三年四月）

日本人中には體質容貌が一人種中の個人的差違以上の違ひのものが澤山ある、人類學上決して單一人種といふことは出來ぬ。日本人は種々な人種が混合して出來た一つの混合民族である、その人種的成分を悉く現はして日本民族構成を明にすることは人類學上の一大問題で、既に内外の學者により種々な説が發表されてある。予は形體的人類學の側から研究してゐるのである。

テニツツ氏（明治八年）は日本民族はマレイ族とモンゴリア族と混合したものと説いた。又ベルツ氏は日本民族を構成する人種を（一）アイノ（二）滿洲朝鮮人型族（三）マレイモンゴリア族の三つとする。

さて日本民族が世界一般にモンゴリア人種即ち黃色人種の一派であるとされてゐるのは人類學上からもその通りである皮膚の黃色なる、髪は黒く直なる、體毛鬚髯の少なき、頭稍短廣（長幅示數男八〇・八一・女八一・九二）なる、顔の平たき、顴骨突出せる、鼻の低き、鼻根の平坦なる、眼瞼裂の狭く且モンゴリア皺に因つて方向斜に見える。鼻前頭縫合の引つ込

み弱き眉弓及び眉間隆起の弱きこと等はモンゴリア人種の發候で、日本人にはこの型式を具備せるものが最多數を占めてゐる。このモンゴリア人種に分派が日本に渡つて來たのは既に石器時代からであつて、朝鮮半島を経て來たのである。この日本民族の本幹となつたモンゴリア人種の一派の遺したものが日本石器時代末期の所謂竈生式遺蹟であつて、朝鮮滿洲にも發見された。其の渡來は金屬時代を経て歴史時代まで行はれた。併し日本人中にはモンゴリア人種と違つた型式のものが少くない。これは他の人種が混入して居るからで、この混入人種には先づ南方から來た種族があるであらう。之等の種族は黃色のモンゴリア人種と類似の點が多い爲めに現在日本人中に何程含まれてゐるかを忖度し難いが、其分量は案外多いかも知れぬ。併し南方種族の先史的遺蹟遺物は未だ發見されてない。されば南方の土俗習慣に依る外仕方なく、その類縁は可なり澤山ある。南方種族中殊にマレイ族に關係がある。然るにこのマレイ族は極めて錯綜せる民族である。この外東南亞細亞の民族の或者が來た蓋然性はあるが、何分手掛りがない。又モンゴリア種族が南方種族よりも先に來たと思ふけれども確證はない。何れにしても大陸からのと南方からのと異種族の間には直に混血が始まつたであらう。

次に日本民族構成に確に與つたものはアイノ人種である。

アイノは類縁のない而して今北海道及び樺太に居る僅か一萬七千五百人許の一小人種である。皮膚は褐色で黃味なく、鬚髯及體毛非常に發育し、鼻背直くて、鼻根高く、眉間隆起及

び眉弓強く發達し、眼はモンゴリア皺を缺き蒙古式ならず、顴骨突出しない事など普通の日本人とは大に違つて歐羅巴僻地の農夫の様などころがある。かゝる點からしてアイノは原アリヤノ人種の殘餘であるといふ説もある位である。かゝる型式の人は現に日本人中に往々見るのであつて、アイノの血液が混入してゐることを表示するのである。

モンゴリア人種が始めて渡つて來た際に、この島にはアイノ人種が住まつて居た。アイノは日本の原住民若くは先住民である。兩種族の間には間もなく混血が始まつた。この作用は爾後絶えず接觸線に於て行はれつゝ今日に迄及んだであらう。かくてアイノ人種は混血同化に依つて縮小しつゝ、西南のモンゴリア系、南方系の移住民族の勢力が段々増大して來るに従つて追々北方へ退却した。アイノと大和民族との關係は深く歴史時代に及んでゐて、史上ではアイノは蝦夷と稱されてゐる。現在のアイノは同化せられずして己が種族を辛うじて保つて來た名残りである。これも遠からず形體的にも精神的にも悉く日本化して仕舞うであらう。最初アイノが日本の地に居たことはアイノが遺したと見做すべき石器時代の遺跡によつて判かる。彌生式遺跡とは違つた、より古い遺跡がそれで、之をアイノ式遺跡と呼ぶ。文化の程度は所謂新石器時代である。この遺跡は日本全國に亘り、夥しい人骨が出る其形體的性質は大體に於てアイノのに一致して居る。但し地方に依つてはアイノ型式と少し違つた人骨を見ることがあるが、これは既に石器時代に於て行はれた混血の結果であらう。

尙ほ昔アイノが住つて居た證據としてアイノ的地名が現に方々に澤山遺つてゐる、殊に東北地方に多い。

要するに以上數へ舉げた數人種が相接觸し平和争鬭を反覆して遂に融和統一して日本民族が出来たのだと考へられる。

(S)

○野村七平、波多江信廣 朝鮮沿岸ニ於ケル貝類分布

ノ概況 (朝鮮博物學會雜誌第六號、九二—一〇〇頁、昭和

三年三月二十五日發行)

東北帝國大學理學部地質學古生物學教室に於て化石貝類との比較研究の必要から昨年の夏以來、朝鮮沿海の各道廳を経て學校并に官廳關係の手によつて蒐集せられた材料を一纏として其の分布狀態を種類各々について表示せられた貴重な報告である。

朝鮮の貝類は最初其の近海のもの僅少が、英軍艦サマランガによつて採集報告せられた後、海産貝類は殆んど何人も手を染めなかつた様である、陸上のものは Carl Gotsche により地質旅行の傍ら採集せられたものが陸産は Moellendorff に、Jahrb. D. M. Ges. XIV, 1887 に、淡水産は Martens に、Jahrb. Sitz. B. Ges. naturf. Freunde Berlin, 1886 及 Zool. Jahrb. Supplm. VIII, 1905, pp. 23—70 との二回に多數の新種を報告せられた。其の後平潮與一郎翁の採集者として摘録者が釜山近傍、巨濟島、濟

州島、本浦等を第一回とし、次で京義沿線を第二回として採集を試みた結果、ゴツチエの採集したものゝ外相當澤山な新種類をも採集し得たが、是等は介類雜誌の第二、第三巻と Proc. Acad. Nat. Sc. Philadelphia, LXXVIII, 1926, pp. 433-415 との外一二の報告がある。

平瀬翁による海産貝類の採集は全く貧弱で摘録者が釜山附近の海岸で極めて僅少を採集し得た外は同氏の通信者から断片的に贈られたもの少數のみが知られて居たに過ぎなかつた。今回野村氏等の蒐集は相當計畫的に廣く行はれた結果で、濱海の諸種に就て概括的に知ることが出来たことは學界のため幸福なことである。

爰に集まつた種類は「二枚貝五九種、巻貝四七種、計一〇六種」であつて、之を東、南、西の三分布區域に分けて報告せられてゐる、そして其の分布の狀態は「東部六一種、南部三一種、西部四一種トナル、コノ中東西南三部ニ共通ナルモノ一一種、東南南部ニ共通ナルモノ九種、東西兩部ニ共通ナルモノ一〇種ヲ數ヘルコトが出来ル」ことを示された、これは僅か半歳の採集の結果からの概況であるのみでなく、兩氏の言はるゝ如く「採集ノ不充分ノタメ未ダ發見セラレナイモノ」も多數であらうから、將來は更に幾倍の數字を示すに至らうことは明なことである、私の採集し得たものと其以外から受取つた種類でも此表以外四五十種は直ぐ思ひ浮べることが出来るばかりでなく、平戸島だけでさへ五百種のフオーナを有することから推しても、朝鮮の沿岸殊に南方の多島海と

深海部には相當澤山な種類を擁するであらうことは容易に想像することが出来る。猶ほ「海岸砂中ノ微細ナル種類」を合すれば、將來一千種位のものを探集するには左して骨の折れることにはなからうと信ずる。

南西部動物群中「幾分カフイリツコン亞區ノ熱帶性」の例として列記せられた五種の内 *Netia pica*, *Bursa rana*, *Terebra "spectabilis"* 等を掲げられたことは、どうかと思ふ、私の考では之等は同じく「日本亞區」中のメンバーと考へる方が正しくはないか、第三の *T. spectabilis* は標本を實見せなため確かに云ふことが出来ないが *T. evoluta* Deshayes (= *T. dussumieri* *hiradensis* Pilsbry) と同定すべきものではなかつたらうか、更に *T. caeruleus* らしきとせられたものも或は似て非なるものであるかも知れぬ、それで残つた一種 *Littorina internedia* も平戸島をはじめ日本内地に相當廣く分布するから、結局此の熱帶性の侵入は元より否定は出来ないが——特に潮流の關係から寧ろ是認することゝ正しいとはするが——其の濃度は更に稀薄なものであると信ぜられる。

寒海性の種類中 *Chrysodomus antipus* と *Ch. despectus* との二種は似て非なる貝であらう。此の意見は北海産貝族の權威、故 Dall (Smiths. Misc. Coll., Vol. 50, p. 139-141, 1907) の意見に従へば太平洋側には棲息しない、となつて居るからである、また 79. *Cerithides montaguensis* (California to Panama) に同定せられた一種も亦別の一種で

最後に此の報告の校正が著者達の手によらなかつたものゝ如くで、誤植が無暗に多かつたことは讀者を誤らせなければよいがと心配する、日本及び朝鮮の貝類に對する文獻を列記せられたことは益するところ甚だ多く、序に「*Adamans*と*Reeve*との合報告 *Samarang* の *Report* は今日では稀有の本で、不幸私共も未見の一冊であるが、朝鮮海峡の貝を若干載せられて居る筈である、また *Dall* の *Synopsis* は *Luccinea* の外約二十篇にも上るべく、二枚貝の大科は大抵取扱ひ盡した、更にまた *Lamy* の *Revision* は *Cyprcardacea* のみならず、*Arctidae* 始め澤山同様のものが *Journal de Conchyliologie* に連載されて居る」とを附言して筆を擱く妄評多罪。(黒田徳米)

新
著
紹
介

○奈良縣に於ける指定史蹟第一冊

內務省藏版

昭和三年二月發行、刀江書院、定價五圓五十錢

本書はさきに出了同史蹟報告第一冊につぐもので、知友上田三平氏の執筆にかゝるものである。第一冊は古墳、石窟佛、石塔等十箇ヶ所を述べ、本第二冊は平城宮址、吉野山、山田

寺、川原寺、大官大寺等十四ヶ所の史蹟の紹介である。圖版
コロタイプ八十枚、四六倍版本本文百頁、誠に堂々たる著述で
あるが、流石官製であるから賣價が馬鹿に安い。歴史學者の
座右にすゝめるべき良書であると同時に過去の奈良を學んで
我國の人文現象を理解せんとする人文地理學者にも是非一讀
せんことをすゝめる。外國のコルドバとか、ナイル河畔の
金字塔だとかいふ古代文化の遺跡は教授しながら、日本文化
の發祥した奈良の平野や平城京の遺址等については何等の智
識も持たぬ所謂人文地理學者の多い今日、内務省のこの種の
本を廉賣普及せんとする態度について大に感謝するものでは
ある、第一冊の如き既に賣り盡したとの事である。第二冊の
方は品切れにならぬさきに學校などの圖書室に備付せんこと
をすゝめる。(藤田)

○有史以前の近江

滋賀縣史蹟調査報告第一冊 昭和三十三年

年四月、滋賀縣保勝會

本書は友人島田貞彦氏が滋賀縣史編纂のこの方面に力を致された結果として世に出たものである。四六倍版三十二頁圖版二十四、挿圖一八からの堂々たる報告書で序語、地形、遺蹟及遺物發見地の分布及その概観、湖北地方の遺蹟、遺物、湖北、湖南、湖西各地の發見遺物、近江國發見の銅鐸等を論じて最後に銅鐸概説及史前の近畿について考古學時代の説明がしてある。猶附録として雲根志と木内石亭の一章がある。考古學者の著述ではあるが、地理學に對する智識の豊富な著者として